

マスコミュニケーション史への一考察

ープリント・メディアの拡がりと大衆読者層の出現ー

中 島 純 一

はじめに

近代における大衆読者層の出現という現象は、マスコミュニケーション史における初期のメルクマークとなる象徴的現象である。18世紀中葉、産業革命期のイギリスに典型的にみられた大量の読者層出現という社会現象には、中世までの一部特権階級にみられた同質的読者層に対し、質量ともに新しい転換がみられた。このような現象は、マスコミュニケーション史研究家のアルティック (R. D. Altick) がいうように、決して孤立した特異な現象ではなく、当時の大衆をとりまく政治・経済及び社会的背景⁽¹⁾の複合した現象として捉えなければならない。

本稿では、大衆読者層出現の背景となった多くの要因の内、大量の読者層へ多くのアクセサビリティを与えた要因という視点から、マスメディアー特に本・雑誌・新聞を代表とするプリントメディアーへの近接性の高まりを中心に考察してみるものである。

1. 出版の発展と読者

大量な読者層の出現は、「本」が商品化され書籍市場が出現してくるのと

一体化しているといっても過言ではあるまい。「本」に資本の論理が貫徹されるようになる以上、その消費者たる読者層と生産者たる出版者との、密接な関係が生まれるのは明らかである。従って、読者層と出版側とのこのような関係に基づいて、例えば「印刷所の増加と書籍の売り上げ高の増加が、読者人口の増大をはかるバロメーターである (L.コーザー)」⁽²⁾と端的にいうことも可能であろう。無論、図書館・貸本屋・コーヒーハウスといった“チャンネル (channel)”があり、さらに「本・雑誌」の購入層は母胎となる読者層の一部にすぎないことを考えあわせるなら、より慎重に考察しなければならないことは言うまでもない。

出版の観点から読者層の拡大を制限していたものは、第1にその発行部数であり、第2に「本」の価格であった。本が商品化された以上、少ない発行部数は高い価格を意味し、必然的に購入者層を限定した。高価で数少ない貴重な本を有し読むことは、まさにヴェブレン (Thorstein Veblen) のいう“衛示的消費”⁽³⁾であり、それは下層階級を書籍市場から締め出す一方、「教養ある一握りの者と無学な多数とを区別する高い身分を表すバッジ」⁽⁴⁾だったのである。従って本が大衆のものとなるためには、本の価格が下げられていくプロセス、逆に言えば、安い本の出現及び発行部数の拡大を中心に考察すべきであろう。公教育の確立・普及に伴う大衆レベルの教育の浸透は、リテレートな層を拡大し、大衆読者層の下地を着々と作る一方で、大衆が大規模な読者層に転じていく為には、大量の安い本の出現を待たなくてはならなかった。ウィリアムズ (Raymond Williams) 流にいうならば「読者層の真の歴史は、人々の中の既に読み書きできる層に、より安い読み物 (reading matter) をもたらしめていく歴史的プロセス」⁽⁵⁾なのである。この節を貫く視点は、18世紀から19世紀中葉にかけての書籍市場の拡大と共に、読者層の底辺を占める大衆に、本は一解放されていたのか否かを、主として経済的側面である価格の点からみていこうとするものである。従って進取的な出版人の多くの廉価本叢書の試みや本の価格が下がっ

ていくプロセスに焦点があてられると共に、大衆は、結局本に接近しえたのか否か、大衆が接近しえた本、あるいは好んだ本とは具体的にいかなるものであったかをみていきたい。

読者層の拡大を妨げた外的要因のうち最たるものは、本が高価であったという事実であろう。18世紀後半の初版本の価格は⁽⁶⁾、5ないし6シリングであったが、当時労働者の週給が約10シリングであり⁽⁷⁾、5シリングあれば5ポイン드의バター、10ポンドの肉が買えたことを思えば⁽⁸⁾、かなり高価であった。また例えばフィールディング (Henry Fielding) のヒット作「トム・ジョーズ (Tom Jones)」は、労働者の一週間分以上の賃金に等しく、「大部分の小説の価格で、1週間あるいは2週間労働者の家族を養うことができた」⁽⁹⁾のである。本の価格は、1780年頃までほぼ一定であり2つ折り本 (folio) と4つ折り判本 (quarto) は、10～12シリングで売られた。8つ折り判本 (octavo) は、5～6シリングであり、小さな8つ折り判本とか12枚折判 (duodecimo) は、2～3シリングであった。続く19世紀に本の価格は上がり、1830年頃にピークに達する。4つ折り判本は、1780年までの倍の1ギニー (1guinea=21s.) にあがり、8つ折り判本も倍の12～14シリング、12枚折判も3～4シリングとなった。

このように本の価格が、18世紀後半から19世紀前半に着実に上昇していったのに対し、大衆の物価変動との関連における実質賃金はほとんど変わらず⁽¹⁰⁾、本との距離は依然と遠かった。当時の下層階級が、本の購入のためにどれくらいあてられたかを知ることが困難なことであるが、廉価本運動という視点から、本の価格に最も関心の強かったブルーアムによると「本を購入する為にほとんどどんな労働者でも、一週間で2ペンスは容易に貯められる。そして職工なら、週に6ペンスは難なく貯えられる」⁽¹¹⁾ことが可能であった。このように下層階級の収入のうち、本にあてられるのはせいぜい週2ペンスであり、アルティックがいうように「下層階級の購買力は、ペニー単位で数えられるほどのものであった」⁽¹²⁾ということを、念頭

におかなければならない。

一体なぜ本はこのように高かったのでしょうか。基本的には、出版業者の中に受け継がれている伝統的保守主義によるものであった。高い価格で少数の贅沢な本を発行するのが18世紀においては主流であった。このような限られた書筆市場が成立しえた背景には、それら高価な本を消費しうる階層が存在していたことを表す。それは従来からの顧客であった上流階級であり、急速に富を貯えてきた中産階級による積極的な購買層の拡大があったためといえよう。

一方見落とせないのは、19世紀に入ってから活発になってくる貸本屋、貸出し図書館の存在である。当初出版者を脅かした貸出し図書館、貸本屋が、本の実質的な大量消費者の役割をはたし、「出版者の利益を保障した」⁽¹³⁾ ことにより、出版者と貸出し図書館・貸本屋とが結びつき、従来からの少数高価販売の方針が再び肯定されたのであった。

本の価格が高かったのは、その諸経費にも一因があった。紙代は全費用の $\frac{2}{3}$ を占めていたのであり、それに高い人件費が付け加えられた。1830年頃までの価格の上昇は、その材料である「紙」が対仏戦争により不足し、紙代が2倍になったためと推定される。19世紀まで紙の製造は大部分手作業によるものであり、機械による製造はやっと19世紀に入ってからであった。1820代末に機械による生産が手工業のそれを超えて、本格的に量産化されるようになる⁽¹⁴⁾。機械による量産化に伴って、価格も次第に下降していくのである。価格に関する以上のような状況を踏まえたうえで、書籍市場の発展をみてみよう。1476年、カクストン (William Caxton) に始まり17世紀中葉までの形成期のイギリス出版業の歴史は、「Stationer's Company の歴史」⁽¹⁵⁾であり、国家の強い統制と保護の枠組の中で成長してきたといえよう。このような流れを受け継ぎながら、18世紀から19世紀にかけて新しい局面を迎えることになる。1740年代初期に出現する多くの小説に伴い、それを消費する中産階級—特に女性読者層の増大・大口消費者とし

ての貸出し図書館、貸本屋の増大—といった消費側の拡大があり、他方従来パトロンの庇護のもとに生計を立てていた著述家を、市場が職業として独立させ、市場法則に隷属せしめるに至った。人気作家の出現及びその読者層の増大は、発行部数を拡大させていった。デフォー (Daniel Defoe) がいうように「著述業は、イギリス商業の極めて重要な一部門」となり、「出版者は、マニファクチュアもしくは大雇用主」⁽¹⁶⁾となりつつあったのである。従来の著述家の利益を保障したパトロンの代わって、直接的には書籍販売業者と出版業者が、間接的には読者層が、その役割を果たしたのである。即ち、出版社と小売書店が、著述家とその読者層をつなぐ重要な媒体となったのであり、その「両者に及ぼす力は、疑いもなく大きくなった」⁽¹⁷⁾のである。このことは、元来“Book Industry”と総括して呼ばれていた「混沌として分ちがたく、いずれも同一の主体によって行われていた諸機能」⁽¹⁸⁾—印刷者、発行者、本屋の機能分化及び発展という形であらわれてくることを意味している。

本の商品化、その生産過程における機能分化は、出版・印刷技術上の向上と相まって進展していくのである。

印刷技術上の発展—印刷機自体の改善と刷られる紙の量産化—は、19世紀に入ってからである。1814年ケーニッヒの発明によるシリンダー印刷機、1827年クーパーとアプルガースの四汽筒印刷機（ロンドン・タイムズを両面同時印刷で、1時間5000枚の割合で刷り上げた）らの到来は、印刷技術の画期的な発展を示した。一方、従来主としてボロキレ等から作られていた紙も、パルプを原料とする量産化が19世紀前半から始まった。「出版産業の他の分野に比べての立ち遅れ」⁽¹⁹⁾は、19世紀前半から中葉に至る一連の技術上の改善に伴い急速に挽回されるとともに、商品としての本の量産化を可能にしたのである。歴史的にみるなら、17世紀から18世紀中葉までの年平均発行点数は、およそ100点であったが、18世紀後半から19世紀初頭にかけて372点となり、1820年までには580点、19世紀末には2600点、20世紀初

頭（1901年）には、6000点に達した。これに1点あたりのコピー数を相乗するなら、著しい拡大であったといえよう。発行部数の拡大と共に、価格は徐々に下がり、最も高かった1830年代のピークを過ぎると、下降していくのである。価格が下がり大衆と本との距離がより近づいたということは、今や「拡大された消費者層」＝「読者層の増大」とともに、商品としての“本”が社会の商業システムの中に組み込まれ、資本主義生産様式がその中に確立されつつあることを表していよう。

価格の定価に伴いアクセサビリティはより近づいたが、永代版権の撤廃それに続く廉価本出版の試みによって、さらにこれに拍車がかけられた。

元来価格の低下を妨げていた大きな要因の一つは、永代版権であった。18世紀に存在した唯一の版権保存法は、1709年に提案され翌10年から施行されたクイーンアン法令（Act of Queen Ann）である。一方、古典にも版権があると考えられ、古典作品に関しては、永代版権ということが常識になっていた。版権の無期限所有はその本の価格の独占を意味するものであり、必然的に版権に関する論議が行われ、ドナルドソン対ベケットのように法廷まで持ち込まれるケースもあった。1767年ドナルドソン（Alexander Donaldson）は「版権の性質及び起源についての考察（Considerations on the Nature and Origin of Literary Property）」という本を出し、永代版権は著者を益するのではなく、出版者ばかりを儲けさせている。従って出版に期限をつけるのがよいと主張したのであった。この主張は1774年上院によって可決され、版権の消失した本はリプリントすることが可能となったのである。この決議が「読者層拡大に及ぼした影響は、計り知れない」⁽²⁰⁾ものがあるゆえに、この時点をイギリス出版界における廉価本誕生の起点とみてよからう。

版権の撤廃のわずか2年後に、ジョン・ベル（John Bell）によって、廉価本出版の火ぶたがきられた。1776年に発行された“チョーサーからチャーチルに至るまでの英国全詩人”（Poets of Great Britain Complete

from Chaucer to Churchill), ブリティッシュ・シアター (Bell's British Theatre (21巻, 週刊)) は, 共に 6 ペンスという破格の値段で売られた(当時の平均価格 5～6 シリング<octavo>, 前掲)。ベルの後, クック (John Cooke) や, ハリソン (John Harrison) らが続いた。これらの本の内容が, 古典・小説等のリプリントであり, 永代版權破棄の恩恵を受けていたことを思えば, その意義は大きい。

本の価格を下げ, よりアクセサビリティを縮めたのは, 永代版權破棄によるところが大きい, その発行形式・本自体の形態の工夫による要因も無視できない。発行形式に関しては, 既に18世紀後半にみられた「分冊発行 (number-publishing)」が注目されよう。長い作品を, 分冊にして発行する形式である。本自体の形態も, 17世紀頃までは 2 つ折り本 (folio) が標準であったが, 18世紀初頭には 4 つ折り判本 (quarto) が多くなり, やがて18世紀末になると 8 つ折り判本 (octavo) あるいは12折判 (duodecimo), 16折判本 (sextodecimo) 等の小型本が普及するようになってくる。小型本は, その手軽さと安価さにより, 形態的・経済的な面から, 読者層—特に婦人層—にアクセサビリティを与え, やがて主流を占めるに至り, “小人が巨人を追い出す”⁽²¹⁾ ようになるのである。

19世紀に入って大衆の入手できる「本の形式」は, 分冊形式によるものと, 古典のリプリント版 (classic-reprint series) によるものであった。これらの多くは, 主流でない小さな出版者によって発行されたのである。1823年に 2 つの廉価本叢者—ウィットニングハム (Whittingham) の「ポケット・ノーベリスト」(Pocket Novelist, 16mo. 各巻 2s～5s. 6d) と, ジョン・リミッド (John Limid) の「文学の鑑」(Mirror of Literature, 2d. periodical)—が出現する。特にこれらの 2 ペンスという低廉さは, 大量の廉価本の到来を示唆するものであった。

続く1825～32年は, まさに廉価本運動の開花期であった。即ち, かの 1 冊 1 ペニーというペニーマガジン (Penny Magazine), ペニーサイクロペ

ディア (Penny Cyclopaedia) を発行し、積極的に廉価本の普及に努めたH. ブルーアムの有益な知識普及協会が登場し、他方でコンスタブルの雑録集 (Constable's Miscellany) が登場するからである。さらにこの時期、最下層を対象としたセンセーショナルあるいはゴシップ小説のたぐいが(2~6d.) 出現してくる⁽²²⁾。センセーショナル、ゴシップ、恐怖話などは、純文学のそれに比して身近で気晴らしとなる内容であり、これを求める大衆側の自然な欲求があったといえよう。1840年代になると、小説・古典本のリプリントを、毎週あるいは隔週ごとに“続き物 (serial publication)” の方式で刊行することが最も普通となってくる。その価格は $\frac{1}{2}$ ~2 ペンスであり、当時の中産階級の読み物が数シリングであったことを思えば、下層階級に普及を促したのは明らかである。

19世紀も中葉に近づくにつれて、下層階級の $\frac{2}{3}$ はリテイトとなり、購買力も増し読者側の要因は充実してくる。そしてこれと歩調をあわせるかのように多くの廉価本シリーズが現れ、大衆にアピールするようになる。既に「チャールズ・ナイト社」から発行されるペニー・マガジンは20万部、ペニーサイクロペディアは7万五千部…と、大衆本・大衆誌市場成立の機は熟していたといえよう。ジョンマレー書店の「家庭文庫」(The Family Library)、シムズ・マッキンタイアー書店の「茶の間文庫」(The Parlour Library)を始め、その他多くの廉価本叢書⁽²³⁾が続き、やがて「爆発的な成功」⁽²⁴⁾をおさめる「鉄道文庫(ラウトレッヂ書店)」(The Railway Library)の出現となる。自ら下層階級の出身であり、大衆の心情をよく理解していたラウトレッヂは、「バイブルや、天路歷程以外に、スタンダードフィクションを求める潜在的マーケットがある」⁽²⁵⁾ことを既に見抜いていたのである。

“大衆のために、ポピュラーな作品を安い値段で” というモットーは急速に伸びつつあった鉄道網に向けた着眼の良さと相まって、1冊1シリングの廉価本叢書を生み出していくのである。黄表紙・挿絵の導入といったアイディアも、このシリーズの拡大に拍車をかけたのであった。このラウト

レッヂ書店の成功に刺激されて、従来傍系の小さな出版社に任されていた大衆向けの廉価本市場に、大手の出版社も眼を向けるようになった⁽²⁶⁾。そしてこの段階に至って、各出版社による本格的な廉価本の販売が始まるのである。

これまでみてきたように、本の価格の低下及び多くの廉価本叢書の試み—といった現象は、確かに大衆と本との距離を縮めたが、はたして大衆はその恩恵を実際にどの程度受けたのであろうか—という問いかけに対して、具体的に大衆がどのような本に接触しえたかをみるのが最も妥当であろう。

1770年代後半に現れてくる一連の廉価本叢書以前に、下層階級の読者層を対象とした読み物の多くは、文学を商品化していく出版界の流れとは基本的に異なる別の流れに属するものであった。流通機構も本屋や文房具商 (stationers) を通してではなく、行商人による場合が多く印刷所も霧細であった。このような読み物の代表的なものは行商本 (chap-book) であった。これは16～20ページの小さなリーフレットの形態をなし、貧弱な紙に印刷され荒い木版で刷られ、 $\frac{1}{4}$ ～1ペンスで売られた。その内容は、物語・歴史・小説の連載、スキャンダル、ゴシップ等を含むもので、「みだらでなければ低俗」⁽²⁷⁾なものであった。この他、一種の流行歌集である “ballad” ($\frac{1}{2}$ ～1d.), 主として俗謡がのせられている “ブロードシート” (broadsheet or broadside) (1～6d.), 大衆の底辺まで到達する “読みもの歴”⁽²⁸⁾ (almanac) 等があった。このような行商本やバラッドがやがて来る廉価本出版まで多数存在していたということは、「貧しい人々の間に、読書習慣の伝統が消えていないという十分な証拠」⁽²⁹⁾であった。これら行商本等のスキャンダル、ゴシップといった内容は、形態を変えて一方では新聞・雑誌に、他方ではロイド (Edward Lloyd) やレイノルド (H・Reynold) らのセンセーショナルな安小説へと受け継がれていくのである。いわば、大衆本の商業形態は、chapbook 方式から popular journal 方式へと移っていくといえよう。同時に、多数の下層階級の読者も受け継がれていくのである。

廉価本出現以前に大衆が接した読み物は、既述したごとく完全な本の形態をなさないものが大部分であった。ところで、本の形態をなしているもので接しえたものにはいかなるものがあったのであろうか。大衆のもつ“本”は、多くの場合「バイブル」であった。これ以外に入手できる本が少なかったというより、彼らが初等学校で字を覚える場合のテキストとして接する本が多くの場合「バイブル」であり、なにより来世の幸福をめざす生活と密着した宗教的背景によるものであった。さらに注目すべきは、アルティックのいうように、「宗教の本というよりは物語として読まれた」⁽³⁰⁾ことである。バイブルに次いで読まれたのは、「天路歷程」(Pilgrim's Progress)であり、1792年までに160版を重ねるに至ったのである。その他多くの家にみられたのが「ロビンソン・クルーソー」であった。

大衆の接した読み物は、内容面からいって大きく2つに分かれよう。一方は行商本等に受け継がれている気晴らし・楽しみとしての読み物であり、他方は厳しい生活状況を来世につなげるパイプとしての、かつ自己改善としての「バイブル」を中心とする宗教書であったといえよう。

大衆の接近できる本は、ある程度限られていたわけで、「決して当時の最上のものではなかった」⁽³¹⁾のである。しかし既にみてきたように、18世紀末から始まった廉価本出版の高まり、19世紀前半の多くの印刷技術・製紙方法の発明・改良に伴う価格の下降等…时期的に言えば、選挙法改正後から19世紀中葉に至るまでの間に、読者層拡大の主要な外的要因が整えられていくのである。

〔註〕

- (1) Altick, R. D. "The English Common Reader" Univ. of Chicago Press 1957. p. 32
- (2) Coser, Lewis A. "Men of Ideas" 高橋徹監訳「知識人と社会」培風館 1970. p. 40
- (3) Veblen, Thorstein B. "The Theory of Leisure class" 小原敬士訳

「有閑階級の理論」岩波書店 1961. 特に第 4 章

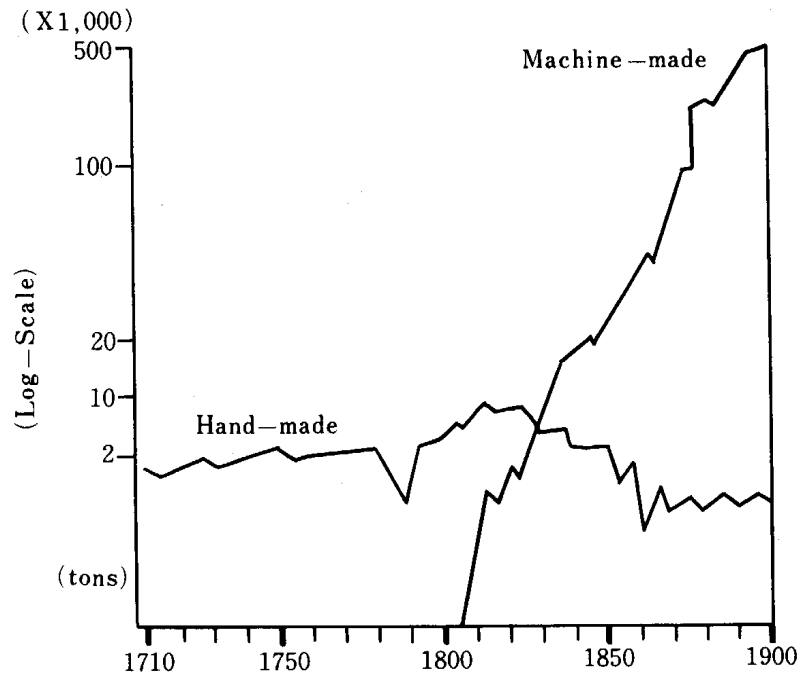
- (4) Coser (高橋 訳) 前掲書, p.41
- (5) Williams, Raymond "The Long Revolution" Penguin Books, 1961. p. 188
- (6) 本の価格については以下のものを参照した。
Watt, Ian "The Rise of the Novel" Penguin Books, 1957
Altick, R. D "The English Common Reader "Univ. of Chicago Press, 1957
Collins, A. S "The Growth of the Reading Public during the Eighteenth Century" R. E. S 1926. Vol. 12
Pollard, A. W "Commercial circulating libraries and price of books " The Library. IX No.4 1929
尚, 小説に限ってその具体的価格をみると—18世紀前半までは, 一冊につき 2s, 6d. が標準であり, 世紀末になると 4s. 1811 年には 5s. (eg. Sense and Sensibility), 1813 年には 6s. (eg. Pride and Prejudice) に上がる。スコット (Scott) の出現と共に価格は上がり (6s → 8s → 10s. 6d) やがて 1823 年頃には一冊 12s~14s に達するようになる。
- (7) Coser (高橋 徹訳), 前掲書 p.41
- (8) Altick, op. cit., p.276
* 尚(7)及び(8)の賃金, 物価に関しては以下のものを参照。
Reeve, Robin M "The Industrial Revolution 1750-1850" Univ. of London Press Ltd ,1971 特に, Part V "Statistics of the Industrial Revolution"
B. R. Mitchell and Phyllis Deane
"Abstract of British Historical Statistics" 1962
Univ. of Cambridge Press.
- (9) Watt, Ian "The Rise of the Novel" Penguin Books, 1957 p. 46
- (10) 前出(8)の統計資料を参照
- (11) Brougham, Henry "Practical Observations upon the Education of the People" 1825. 浜林正夫訳 "人々の教育についての実際の観察" 「イギリス民衆教育論」明治図書, 1970. P. 120
- (12) Altick, op. cit., p. 287
- (13) Ibid., P. 263
- (14) この状況を表でみると以下のようなになる。

引用

「English and U. K. Production of Hand-made and Machine-made paper」

Coleman, D. C. "Industrial Growth and Industrial Revolution"

Economica. Vol. 23 1956. p. 11



- (15) 香内三郎 “アレオパジティカ周辺” 東京大学新聞研究所紀要 第11号 1962. p.46
- (16) Williams, op.cit., p.183
- (17) Watt, op.cit., p.59
- (18) 福原麟太郎 “福原麟太郎著作集 11” 研究社 1968. pp.378~379
- (19) Altick, op.cit., p.262
- (20) Ibid., P.54
- (21) Ibid., p.278
- (22) チャルズ・ナイトやチェンバーズが、中産及び中産下層階級を対象としていたのに対し、最下層の読者を対象としたいわゆる「Salisbury Square Publishers」と呼ばれる出版人がでてくる。すなわち、John Clements, J. Cunningham, John Cleave, Edward Lloyd らであった。彼らにより、多くの安小説や大衆本が生み出されるのである。
- (23) このほか当時の廉価本叢書のめぼしいものをあげると、
 “Library of Interesting Knowledge” (Charles Knight) 3s. 6d.
 “Standard Novels” (Bentley and Colburn) 6s.
 “Aldine Poets” (Pickering) 5s

- “Miscellany” (Constable) 3s. 6i. …etc.,
- (24) 佐藤 喬 “英国出版人群像” 慶応義塾大学 法学部 教養論叢 Vol.22 1968. No.3 p. 21
 - (25) 同上書 p.22
 - (26) しかしロングマン社のごとく「民衆には、廉価本を要求する固有の権利はない」という主義のもとに廉価本の要請には応じなかった出版社もあったのである。
 - (27) Altick, op. cit., p. 74
 - (28) 参照: Webb, R. K “The British Working Class Reader” George Allen & Unwin Ltd. London 1955. 特に第II章。
almanac の普及ぶりをあげると…例えば “Prognosticating Almanac” は, Paradise Lost (失楽園) の約10倍も売れたのであり, その他 (1820年代) 3つの scientific almanac は3500部, sheet almanac は5000部であり, 最もポピュラーで星占術の類のものは—Moore’s, Moore’s Improved, Poor Robin’s, Season on the Season—らは, 500,000部にも達したのである。
 - (29) Altick, op. cit., p. 29
 - (30) Ibid., p. 255
 - (31) Ibid., p. 259

2. 廉価本運動

前節では、読者層拡大の外的要因たる出版状況—特に本の経済的側面(価格)及び廉価本市場の拡大—について述べた。ところで18世紀末から19世紀にかけての廉価本運動の高まりと、それを押し上げる時代精神をみる場合、かのブルーアム (Henry Brougham) の率いる「有益な知識普及協会」(Society for the Diffusion of Useful Knowledge, 以下 SDUK と略) の活動に触れざるをえない。なぜならそれは実際の廉価本運動の旗頭で廉価本の普及に貢献したのであり、かつそこにはブルジョワジーの廉価本への典型的な意図が反映されていたからである。本節では、この SDUK の活動を中心に当時の廉価本運動の「流れ」をみていくのが主眼である。

当時の大衆の教育及び識字教育に対する支配階級の立場は、大別して推進派と反対派があった。前者を代表するのがブルーアムらのいわゆる急進

的ブルジョワジーであり、SDUK の活動であった。この SDUK 設立の起点は、ホイッグ党系の議員で社会改革者であったブルーアムの「人々の教育についての实际的観察」(Practical Observations upon the Education of the People. 1825.) という小冊子に始まる。ブルーアムはこの小冊子の中で、労働者階級が知識を獲得するのを妨げられている要因として、二つ一金のないことと時間のないことを挙げている⁽¹⁾。ブルーアムがこれらの要因をどの程度真に洞察していたか問題だが、前者は貧しい者が本・教師・学校に接することを妨げていた経済的要因であり、後者は急激な産業の発展によってもたらされた過酷な労働の結果であったことを考えれば、的確な指摘といえよう。従って、貧しい人々の間に知識を促進させる為に、ブルーアムの発想は「安価な出版物の奨励」へとつながる。さらにブルーアムは安価な出版物を流通させる場合の大きな妨げとして、「紙の生産コスト高」と、いわゆる「知識の課税」一紙への直接税⁽²⁾があることを指摘している⁽²⁾。ゆえにこれらのバリア⁽³⁾ (barrier) を撤廃することもその目的となるのだが、現実的の第一歩としてまず分冊形式の発行を主張する。「ほとんどどんな労働者でも1週間で2ペンスは、容易に貯められる」⁽⁴⁾のであり、これらの分冊形式の読み物(1冊分2〜3ペンスであった)を購入できたのである。加えて購読力の小さい労働者が(読み物に)接近しうる手段として、図書館とブッククラブを挙げている。ブルーアムの究極的な意図はともあれ、下層クラスの本の量的普及という観点からみるなら、そのクラスの購買力を分析し、それに焦点をあててその条件にあう形式で発行あるいは利用を促進しようとした努力は評価すべきであろう。

このようなブルーアムの考えをもとに、「有益な知識をコミュニティを構成するすべての階級のもとに、とりわけ教師に恵まれない人々、又は自分で勉学しようとする人々のもとに届ける」⁽⁵⁾ことを目的として1826年に協会は結成された。同協会は、知識普及の手段として出版活動をプログラムに組み入れ出版委員会を設けた。翌1827年には最初のシリーズである「有益

な知識文庫」(Library of Useful Knowledge)が出される。この「はなはだ科学的で功利主義的であった」⁽⁶⁾シリーズは、隔週おきに発行され6ペンスであった。続いて別のシリーズ「楽しい知識文庫」(Library of Entertaining Knowledge)が分冊形式各2ペンスで刊行され、廉価本運動の一步が築かれる。

しかし、ブルーアムによってまかれた種子が大きく開花するのは、1828年に協会の出版企画のプランナーに加わったチャールズ・ナイト (Charles Knight) によるペニーマガジン (Penny Magazine)、ペニーサイクロペディア (Penny Cyclopaedia) といったペニー本の出現であった。労働者にあてられる書籍購入費が、せいぜい週1〜2ペニーであったことを思えばこれら1冊1ペニー本の出現こそ、まさに真の廉価本の到来といえよう。協会はこの外多くの廉価本叢書を発行し⁽⁷⁾、1820年代後半から30年代にかけて、「チェンバーズ・エディンバラ・ジャーナル (Chamber's Edinburgh Journal)」, キリスト教知識普及協会 (SPCK) の発行する「サタディ・マガジン (Saturday Magazine)」と並んで廉価本運動を高めていくのである。

大衆への知識の普及を妨げていた大きな要因が、本の価格であったことを考えるなら、大量の廉価本の普及は相対的に読者側のアクセサビリティを高め、それを享受する層を着実に広める。即ちプリントメディアによるコミュニケーション回路の受け手層の着実な拡大を意味するのであり、既に広がりつつあったリテラシーを下地として、そのインパクトは大きい。

「大衆は、1ペニーあるいは2ペニーの読み物に飢えていた」⁽⁸⁾のであり、例えばペニーマガジンは、最初の3〜4年間で20万部にも達するのである。

しかし、これらペニー本の消費者が、すべて労働者階級であったと断言するのは早計であろう。「協会のもともとの対象は、労働者階級の読者であった」⁽⁹⁾が、そのクラスに浸透するのに成功したとは言いがたい⁽¹⁰⁾。前世紀以来の大衆の読み物であった「読み物暦 (almanac)」や「マップ (map)」

が」疑いもなく底辺の労働者階級にまで浸透していったのに対し、ペニーマガジン、ペニーサイクロペディアは、ある線で止まってしまう。これは、価格面でのアクセサビリティではなく、内容面のそれで捉えるなら容易に理解できよう。当初ペニー本の到来に飢えていた大衆に、これらの読み物は量的に普及する。しかし内容は必ずしも大衆の要求にそっていたとは言いがたい。ブルーアムにみられるごとく、これらの本の意図は、大衆誌による教化(Indoctrination)であり、有益な知識の上からの押しつけであり、その内容は必然的に啓蒙的内容となるのである。実際「それぞれの内容のタイトルすら多くの人にとってはむずかしすぎ」⁽¹¹⁾、これらのペニー本が「大衆の中で読書欲求をはやめたと安直にみなすことはできない」⁽¹²⁾のである。結局香内三郎のいうように上からの「啓蒙」の限度を反映してせいぜい中産下層階級の線に止まり、最底辺には入ってゆかないのであった。⁽¹³⁾ブルーアムらの廉価本運動によって価格という大きな問題も取り除かれたが、さらに内容が大衆の欲求にフィットする大衆誌・大衆的読み物が出現するのは、「全くの商売人が出す新型誌の出揃う1843～46年までの間に群生する活字媒体」⁽¹⁴⁾の到来を待たなくてはならないのである。1冊1ペニーという形式面での廉価本の案出には成功したもののそれを積極的に推し進めたSDUK自体のもつ内面的限界により、浸透の下限も自ずと設定されたといえよう。この“内面的限界”は、SDUKの設立者であるブルーアム及びその廉価本運動を積極的に推し進めたナイトの理念をたどることによって、より明らかにされよう。

ブルーアムの教育活動は、大きく3つに分かれる。第1は貧民児童の教育であり、貧民児童のための教育法案の提出等を行なった。第2はブルジョワ自体の教育である。ロンドン大学の設立等に貢献した。第3は成人教育であり、職工学校やSDUK等の設立に努めた。ブルーアムにとってSDUKはあくまで成人教育活動の一環であり、それはウェッブ (Webb, R. K) のいうごとく「大衆誌を通しての“インフォーマル”な教育手段」⁽¹⁵⁾であっ

た。ブルーアムの背景にあったのは、ベンサム (Bentham Jeremy) を源流とする功利主義の理念であった。当時の廉価本運動の大きな流れの一つが、時代精神の表れである功利主義思想を基盤としていたのである。功利主義の目標の一つとして“有用な知識の普及”が置かれていた。この有用な知識の意味は、具体的には(1)当時の産業発展に伴う機械主義の恩恵を広げ増大するのに必要な知識であり、(2)さらに「国家の政治・経済発展の原理となるもの」⁽¹⁶⁾であった。このような功利主義思想を背景としたブルーアムの教育理念は、国家の生産増大をめざす“教化”であり、現体制の平和・恒常性を維持するための認識を認めさせるための承認—即ち「賢明で有徳な中産階級が支配する現実の社会体制そのもの、私有財産の安全と選挙権の拡大を基礎とし、国王を頂点とするピラミッド型混合体制の承認」⁽¹⁷⁾を迫るものであった。従って SDUK 自体も「財政的にも管理面においても、全く上流クラスの援助に依っていた」⁽¹⁸⁾である。

ブルーアムの理念を発展的に受け継いだのが SDUK で、実際の廉価本発行を受け持った者がナイトであった。ナイトの言う有用な知識とは「蓄積、即ち資本は、絶対に労働者の雇用に必要であること、つまり私有財産の安全と資本と労働の利害の一致が内容であった」⁽¹⁹⁾のであり、ブルーアムの体制視点を補強してブルジョワ社会の承認を迫るものであった。功利主義思想を基調とした SDUK のめざしたところは、結局のところ安価な読み物を差し出して下層階級のアクセサビリティを高め広い範囲内の読み物を自由に選択させるというのではなく、あくまで彼らのいう「有用な知識—限られた選択範囲内で一の普及」であり、究極的には“教化”であった。

一方これに対してもう一つの大きな流れは、宗教的理念を背景とした団体の行った廉価本運動である。18世紀の末から宗教関係の出版物が、非常に増えてくる。その中で特に注目になるのが、1795～98年にかけて大規模な出版活動を始めたハナー・モア (Hannah More) らの「廉価版知識の宝庫 (Cheap Repository Tract)」であった。これはもともとペイン

(Tom Paine) の「人間の権利 (The Right of Man)」に象徴されるような下からの政治意識の盛り上がり、ひいては社会秩序の維持に不安をもたらす騒乱を防ぐための体制擁護意識に基づくものであった。この流れは、やがて宗教関係の廉価本やパンフレットの普及を盛んに押し進める「宗教出版協会 (Religious Tract Society)」の設立 (1799年) に至るのである。この協会と並んで19世紀に入ってから活発に廉価版宗教出版物普及の活動を行うのが、既に1699年にその設立をみて慈善学校によって大衆の教育を推進していたキリスト教知識増進協会 (Society for Promoting Christian Knowledge, SPCK) であった。1819年、出版委員会が作られ、正式な宗教出版活動が開始されるのである。歴史・伝記・科学等のトピックを盛り込んだ学校用のテキストである「キリスト教知識文庫 (Library of Christian Knowledge)」及びペニーマガジンと共に、この時期の双璧をなしたサタデーマガジンといった廉価本が発行されたのである。

ところで、これらの宗教出版物の普及を押し進めたこの時代の推力はいかなるものであったのだろうかということを念頭に置きつつ、大きな方向性を提示してくれるものと思われる18世紀から19世紀にかけての宗教活動に注目してみよう。

この時期主流を占めたのが、ウェズリー兄弟 (John Wesley, Charles Wesley)、ホイットフィールド (George Whitefield) を中心とする宗教復活運動＝メソジスト運動であった。この中でも特にウェズリー派は、アルティックが評価しているように⁽²⁰⁾、下層階級の読者層形成に大きな役割を果たした。創始者であるジョン・ウェズリーは、神の世界を知りキリストの慈悲を受けるため、毎日少なくとも5時間を読書に費やせと主張したのであった。ウェズリーによって執筆された読み物は、1740年代頃からメソジストの読書室 (Methodist Book Room) を通して大量に配布されるようになり、当代の人気作家—ミルトン等の作品を導入したことと相まって、下層階級の読者の広がり大きく貢献することになる。このような

大衆読者層の形成に大きなインパクトを与えたメソジスト運動の意図するところは、下層階級に対し福音信奉を鼓舞し、現世における困苦を来世への救済に転化させ現状容認の認識を植えつけることであった。これは現世の不平等を認知させるものであり根底で“教化”へとつながるのである。このような運動は、やがて上流階級にも広がり、1830年代を頂点とする福音主義運動 (Evangelical Movement) となる。メソジスト運動及び福音主義運動が、内に保守主義を秘めているとはいえ、それらが現状の不満・困苦をうまく来世への幸せにすりかえることにより、社会不安・社会騒動のエネルギーを吸収した点には効果があったといえよう。従って、この時期の宗教出版物—特に「福音主義に基づく多くのセンセーショナルな宗教パンフレット」⁽²¹⁾—の配布も、このような線に沿ってみるならその意図は明らかであろう。

この時期の廉価本運動を推し進めた流れは、大別して3つになろう。第一は、時代精神の表れである功利主義思想、第2はこの時期特有の宗教的側面—メソディズム、及び福音主義、第3は前節で述べたごとく多くの書籍業者、出版業者による廉価本叢書の試み—があげられる。特に前者2つの流れである功利主義思想と福音主義との関係に注目しなくてはならない。これら一見異なる分野の理念は、同一の目標に向かって予期しない調和をもって結びついたのである。既述したごとく、功利主義思想は下層階級に対して常に“教化”が主眼であり、また福音主義は現状容認の意識の強化を意図していたのであり、共に現体制の維持強化、ひいては国家の発展という点で一致していたのであった。そこには、廉価本というより大衆の近づきうるインフォーマルな教育手段で、これらの理念を啓蒙していく意図があったといえよう。同一の理念に向かって2つの大きな流れは合流し、まさに日曜の福音主義は、週末の功利主義になったのである。

このように、19世紀前半これら SDUK のペニーマガジン、SPCK のサタデーマガジンといった廉価本運動の先駆をなしたものの背景には、明らか

に支配階級の「てこいれ」があったわけである。当時の支配階級の理念が、2つの変形した理念—功利主義、福音主義—として表出し、大衆への廉価本推進の推力となっていくのである。これら啓蒙・教化を意図した廉価本運動は、必然的にこれらの読み物の内容を限定し、大衆の下からの関心と一致せぬ場合が多く、大衆との距離をもったままやがてくる書籍業の発行する安小説やセンセーショナルな雑誌といった一連の安い活字媒体に、その対象たる大衆の読者層を吸収されていくのである。換言するなら、19世紀中葉までのこれらの功利主義、福音主義に基づいて支配階級の差し出す多くの廉価本の試みは、決して社会階層の底辺までは到達せず、中産下層階級の線で止まってしまうのである。真に本が大衆にまで広がるのは、19世紀中葉以降の大衆誌の到来を待たなくてはならないのである。

[注]

- (1) Broughm, Henry "Practical Observation upon the Education of the People" London, 1825. 浜林正夫訳「人々の教育についての実際的観察」
「イギリス民衆教育論」明治団書、1970.p.118
- (2) 因みにこの時期の紙税は、紙1ポンド（重さ）につき3ペンスであって、それは8つ折判本1冊につき8～9ペンスの価格上昇にならざるをえなかった。従って本の価格が、当時として考えられる下限の3～4シリングに引き下げられたとしても、その $\frac{1}{4}$ ～ $\frac{1}{5}$ が税金のためにつけ加えられねばならなかったのである。
- (3) 前者—「紙の生産のコスト高」については、1830年代から開始される蒸気機関による機械制生産様式の移行に伴い解消されるのである。
- (4) Broughm（浜林正夫訳）、前掲書、p. 120
- (5) Webb, Robert K. "The British Working Class Reader" George Allen & Unwin Ltd. 1955, p. 67
- (6) Altick, Richard D. "The English Common Reader" The Univ. of Chicago Press 1957, p. 269
- (7) この他 farmer 向けの booklet, かなりの成功をおさめた一連の almanac や map の類であった。
- (8) Altick, op. cit., p. 335
- (9) Webb, op. cit., p. 72

- (10) 実際、例えばマンチェスターでは、協会の出版物は労働者クラスには、ほとんど知られていなかった。またリーズでは、主としてそれは上流および中産クラスに売られたという書店主のブルーアムに対する報告がある。

参照：Webb, op. cit., pp. 67-69

- (11) Altick, op.cit., p. 70
(12) Ibid., p. 71
(13) 香内三郎 “近代大衆文化の形式と印刷” Energy. vol. 10 No.3 1973. p. 18
(14) 同上書
(15) Webb, op. cit., p. 66
(16) Altick, op. cit., p. 131
(17) 安藤悦子 “イギリスにおける労働者教育運動の成立” 歴史学研究, No. 272 1963. p. 12
(18) Webb, op. cit., p. 159
(19) 安藤悦子, 前掲書 pp. 12-13
(20) Altick, op. cit., p. 36
(21) Watt, Ian “The Rise of the Novel—Studies in Defoe, Richardson and Fielding” Penguin Books, 1957. p.40

3. ジャーナリズムと読者

大衆読者層の出現をみる場合に重要なのは、単行本以外の新聞・雑誌といったジャーナリズムの台頭とその読者層の拡大である。これら定期刊行物 (Periodicals) が、単行本より価格が安く定期的に刊行されてアクセスしやすいという機能に加えて、何よりこれらが読者層形成の重要なモウティブたる政治意識（大衆の側からの）と密接に関係があるからである。

「近代的新聞」の成立は、宗教改革以来活版に利用されたパンフレット、それを発展継承した“形”での「新聞」を貫く政治コミュニケーションの中・下層階級への拡大によるものであり、その基盤として、資本主義経済の確立によってもたらされた市民社会の成立による情報需要の拡大、労働者階級の生活水準改善による情報享受層＝消費者の大衆化……という状況があった。さらに、公教育の普及に伴うリテラシーの拡大という大衆側の

“下地”ができつつあったこと、ケーニッヒのシリンダー印刷機（1814）による大量印刷の開始……といった一連の政治的・経済的・社会的・技術的要因が結びついて近代的新聞が開花するのである。

しかし、近代的新聞に象徴される“近代ジャーナリズム”の成立を追うことは、この節の目的ではない。ここでの関心は、近代ジャーナリズムがいかにして成立していったかではなく、近代ジャーナリズムが発展成立していく過程においてその消費者層である読者層—特に大衆者層—の拡大にいかにかアクセスを、インパクトを、与えてきたかをみるものである。従って、新聞を含んだ読み物全般に常に伴う価格の問題、特に新聞の場合発行者の政治的思惑に対する政府の圧迫—「知識の課税」—との関係、他方下からのモウティブの大きな流れであった「政治意識」を掘りおこし形成していったパターン—大衆とラディカル紙との関係—の2つの観点にそってみたい。

18世紀及び19世紀にかけてのジャーナリズムの展開を、主に新聞に焦点を合わせて時代区分をし、その時代区分内で雑誌をも含むジャーナリズムの特質—特に読者層増大に関する諸側面を考察していくことにする。

初期の印刷については言うまでもなく国家の強い統制のもとにあった。1662年、許可法（Licencing Act）による印刷業者の制限、翌1663年の新聞監督官の任命により「事実上印刷によるニュースの独占が行われていた」⁽¹⁾のである。しかし、1695年に有効期限切れとなった「許可法」の更新を、議会が否決し葬り去ったことにより、ジャーナリズム発展の大きな転機となったのであり、その結果「許可制廃止の効果は著しかった」⁽²⁾のである。従って、この時期より定期刊行物の急増した1730～60年までを1区分として捉えられよう。

全般に初期の段階におけるジャーナリズムの発展は、ウィリアムズ（R. Williams）が言うように「中産階級の読者層の発展の歴史」⁽³⁾であった。即ち社会体制の資本主義への移行とともに、古い封建的旧体制の勢力と新興

ブルジョワジーとの政治的闘争は、多くの政治的パンフレットを生みをだし、政治的コミュニケーションとしての新聞の前史を築くのである。政治的パンフレットを継承した新聞は政治的闘争の手段として、ニュースの伝達、意見の形成に加えて、世論の機関としての性格をもち近代的新聞に至るのであり、それを担ってきたのは社会の新しい大勢力となりつつあった新興ブルジョワジーであった。1702年、初の日刊紙デイリー・クーラント (The Daily Courant) が現れ、次いでアディソン (Joseph Addison) 及びスチール (Richard Steele) のタトラー (The Tatler, 1709.), スペクテイター (The Spectator, 1711.) らの一連の新聞 (広義の) が続く⁽⁴⁾。このタトラー及びスペクテイターは、新聞というよりむしろ発行者の論説を中心としたものであり、その路線として新しい紳士道を説きつつ英国独特のエッセイ文学の源流となるのである。18世紀初頭において当時としては破格の14000部 (スペクテイター) にも達した背景には「新興の階級にこういう文章が強くアピールしたことが大きな原因」⁽⁵⁾であった。

続く1730年代から、週刊紙、月刊紙といった定期刊行物 (Periodicals) が急増してくる。これら多くの定期刊行物を支えるものは、アン女王時代以来の政党ジャーナリズムの流れであった。この中に、後のあらゆる“雑誌”の原形となる「ジェントルマンズ・マガジン」 (Gentleman's Magazine) があった。1731年エドワード・ケイブ (Edward Cave) の創刊によるこの雑誌は、旧来の政治的ジャーナリズムと統合しながら「内容の多様性と詳しい情報を載せて、より多くの“taste”に訴えようと試みた」⁽¹⁶⁾のであった。実際それは多様な内容を含み、まさに「magazine の語源のごとく“知識の宝庫”であった⁽⁷⁾。このような新しい方向は、読者層増大という観点からみるなら、読者のもつ多様な“読み”の動機に答える新しいモデルをつくり、やがて来る大量の安い雑誌の原型としてその意義は大きい。ゆえにワット (Ian Watt) が、「18世紀におけるジャーナル面での偉大な考案」⁽⁸⁾と表現したのにもうなずけよう。しかしこのような Gentleman's Magazine

の新しい模索があつたにもかかわらず、1760年頃までの初期のジャーナリズムは、例えばスペクテイターに代表されるごとく当代の一流ライターによって書かれ、その内容は「中産クラスの“taste”にあわせられていた」⁽⁹⁾のであつた。さらにジャーナリズム自体の経営が、未だ主として個人によるものであり、「ワンマン・ジョブの域を多く出ない」⁽¹⁰⁾状態であつたことから察せられるように、価格、発行部数の点からも限度があり、必然的にアクセスできる層を限定したのであつた。結局初期のジャーナリズムは、新興中産階級の意見の創造、マナー・思想の伝播、情報の提供に奉仕したのであり、いわば“新興中産クラスの産物”であつた。初期のジャーナリズムは、大衆読者の形成にほとんど貢献しなかつたといえよう。ジャーナリズム―特に新聞を大衆から妨げていたのは一連の「知識の課税」であつた。国家の新しい時代・状況に対する統制は、事前許可制からこのような物品税という形式にとって代わられる。印紙税・広告税といった「知識の課税」が、新聞の普及、価格の低下の最大の歯止めとなつたのである。従つてこれらの課税の推移をみることは、大衆と新聞との距離を知るひとつの手がかりとなろう。当初、半ペニーで始まつた印紙税及び1シリングの広告税は⁽¹¹⁾、これ以降徐々に引き上げられ、1815年にはそれぞれ4ペニー、及び3シリング6ペニーにまで達し、価格の低下を妨げると共にその普及の大きな障害となる。従つてこれらの障害が大幅に軽減される1836年（印紙税 4d.→1d. 広告税（1833） 3s. 6d.→1s. 6d.）までを一区切りとしてみてみよう。

ちょうど産業革命期を背景としたこの時期は、社会の急速な資本主義体制への転換に伴う多くの社会的混乱と共に、大衆の政治意識を高揚させ、ラディカルプレスを出現させる土台が準備されつつあつたといえよう。1760年以降世紀末までに、「パブリック・アドバタイザー（Public Advertiser）」（1771年）、「タイムス（The Times）」（1755年）を始め多くの新聞が発行され⁽¹²⁾、1776年に再び引き上げられた印紙税にもかかわらず、その発

行部数は急速に増大していった。引き続き行われた政府の度重なる圧迫—1789年、1797年の印紙税・広告税の引き上げ及びそれに伴う価格の上昇—に対してさえも量的に拡大していったのは、既に定着した読者層があったことに加えて、アクセスを維持する媒介項としてのチャネル—コーヒーハウス、ブッククラブ等—があったことを示していよう。この時期フランス革命（1789～95年）が起り、新聞雑誌を通しての大衆側の政治意識の高揚、（新聞雑誌への）積極的な接近が生じてくる。このことは、かのペイン（Tom Paine）の「人間の権利」（The Right of Man）の空前の売れ行きに象徴されよう⁽¹³⁾。フランス革命という支配階級を揺さぶる政治的インパクトは、必然的に体制側の色彩の濃い反対派と支持派に分断した。前者がバーク（Edmund Burke）の「フランス革命についての諸考察」（Reflection of the French Revolution, 1790）に代表されるなら、それと対照をなすのが、「人間の権利」であった。ペインの鋭い洞察は、既にその第2部で腐敗した選挙制度の矛盾をつき普通選挙法の実施を主張するとともに、それは何より「政治的民主主義が一つの抽象ではなく、大衆が人並みの生活をなしうるための道程であることを、はじめて明らかにした」⁽¹⁴⁾という点で注目しなければならない。まさにこの意味で「人間の権利」は、記念碑的存在でありウェップの言うごとく「この時代の“宣言”」⁽¹⁵⁾であった。ラディカルプレスのはしりとなったこの「人間の権利」は、政治的モウティブのある多くの人々に訴えその読者層を開拓していった。3シリングで売り出されたこの本は、「何らかのルートで購買能力のない層にまで広がっていった」⁽¹⁶⁾のであり、翌1792年のリプリント版の出現と相まって急速に売れ、政府の圧迫にもかかわらず20万部にも達したのであった。読者—特に労働者階級の政治的モウティブと密接につながったこの書物は「労働者階級の運動に共通の教科書」⁽¹⁷⁾となり下層クラスに浸透していく一方で、19世紀初頭から活発になるラディカルプレスの拡大に貢献したといえよう。「人間の権利」に象徴されるラディカルプレスの出現は、続く対仏戦争のさなか、多

数の政治的パンフレットや「十分に独立した “Political Press”」⁽¹⁸⁾を生みだし1810年代から現れるコベット(William Cobbett), ウーラー(Thomas Wooler)らのラディカル紙へと継承されていくのである⁽¹⁹⁾。

対仏戦争の間に、新聞はますますその読者を増やすとともに、今や「政治関心が、一般的な英国人の日常生活の要素として」⁽²⁰⁾定着してきたのである。このような状況を背景に、1802年に始まったコベットのポリティカルレジスター(The Political Register)により復活したラディカルジャーナリズムがスタートを切る。「汚職と権利乱用を常に攻撃し、被抑圧者たちの運動を擁護する態度で一貫していた」⁽²¹⁾このラディカル紙は、その主張する内容と大衆の政治的モウティブが結びつき普及していくのである。値段の高さ(1s, ½ d.)にもかかわらず、コベットの種々の試みにより⁽²²⁾、経済的に制限された人々にまでこれは到達するのである。コベットに続いてウーラーの「ブラック・ドwarf」(The Black Dwarf, 1817. 週刊 4d.)をはじめ多くのラディカル紙が出現し、まさに「19世紀の始めは、急進的民衆誌・紙がすさまじい浸透力を示す」⁽²³⁾時期であった。

対仏戦争後の国内の大不況と恐慌(1815～22)は、下からの労働運動、社会改革運動の高揚をもたらす一方、それに対するトーリー党内閣の弾圧政策を導き出した。即ち、1817年の「強制法(Coercion Act)」より「六法令(Six Act)」に至る一連の弾圧法令であった。特にこの六法令は、その条項の中で6ペンス以下で販売される一切の新聞またはパンフレットに対して、1部につき4ペンスの新しい税を課した。いうまでもなくこの法の意図したところは、コベットの「2ペンス・レジスター」紙のような出版物の発行を阻止することであり、新聞の意見を押さえることを目的としたのである。

このような一連の政府の印刷物に対する弾圧は、大衆の政治的モウティブをつぶすどころかかえって刺激したのであった。このことは日刊紙はもとより10万台という大量発行の日曜新聞(Sunday Newspaper)の出現に

みられよう。日曜新聞の多くが無検印 (unstamped) であり (従って価格は安い), 労働者の多くが新聞に接する日は日曜であったことを考えるなら, 日曜新聞はタイムズのごとく社会的地位のある中産階級向けの新聞に比してより貧しいクラスに奉仕したものだといえよう。日曜新聞は, 大衆の政治的意識に答えるために「ラディカルな意見の中心的な機関紙」⁽²⁴⁾ となったのであり, 大筋においてラディカルプレスの流れをくむものであった。

一方大衆の娯楽・気晴らしのモウティブに答えるものとして, この時期多くの廉価版雑誌が出現する。1820年に1万部に達したジョンブル (John Bull, weekly) を始め, 1830年代には (前節で既述したごとく) ナイトのペニーマガジンを代表とするような “Cheap Journalism” のブームを引き起こしたのであった。これら1ペニーといった廉価本・廉価版雑誌の出現は, 当時の新聞が平均7ペンスでそれらにアクセスできなかった層に訴えたこと, 雑誌の内容がスキャンダル, コミック, 小説といったバラエティに富んだ内容を含み, 読者側の多様な関心に共鳴したこと等により「新しい読者層の決定的拡張」⁽²⁵⁾ となったのである。

また, この時期におこったチャーチスト運動は, 再びラディカル紙を浮上させ, 1830年には, 急進派定期刊行物全部の中で最大のものと思われる「貧民の守護者」(Poorman's Guardian) が発行される。印紙税あるいは六法令等によって, あらゆる新聞に対して課税をし, 労働者階級の運動及びラディカルな思想の芽をつもうとした時の政府にとって, この時代の“貧民の守護者”紙の発行そのこと自体が階級的挑戦⁽²⁶⁾ であった。一連の“知識の課税”に対するコベットあるいはこの「貧民の守護者」らの闘争は, 法を無視して1ペンスで発行され, 政府に公然と立ち向かったのであった。これらの努力は実を結び, 選挙法改正を境に, 1833年広告税は3s, 6d. → 1s, 6d. に, 1836年印紙税は4d. → 1d. に軽減されるに至った。これらの課税の引き下げが, ジャーナリズムの拡張をもたらし⁽²⁷⁾, ひとつの転機となったことはいうまでもない。従ってこの時期より, 知識の課税が完全に撤廃され

る1855年までを、1区切りとして捉えられよう。

広告税・印紙税の引き下げは、シリンダー印刷機等の印刷技術の発達、鉄道網の普及と相まって、日刊紙や日曜新聞に特に著しい変化をもたらした。1855年の日刊紙の総発行部数が6万であったのに対して、日曜新聞のそれは、約27万五千であった。ラディカルな流れを多分にくむ日曜新聞や、ロイド、レイノルドらのラディカル誌が、政治的モウティブのある読者層を拡大していく一方で、労働者を対象として発行される多くのペニーウィークリー (penny weekly) があった⁽²⁸⁾。これらに共通の要素は、露骨でげげばしいセンセーショナリズムであり、大衆の気晴らし、娯楽としてのモウティブにあうものであった。この種の流行雑誌の内容は、決してこの時代の考案ではなく、第1節で既述したごとく、前世紀の「行商本」(Chapbook)・バラッド (Ballad) らの内容・形式を吸収し、姿を変えながら、その流れを継承しているものであった。

しかしながら、大衆が新聞・雑誌に真に近づく為には、1853年から60年にいたる一連の「知識の課税」の撤廃まで待たなくてはならない。1853年の広告税、1855年の印紙税、1860年の紙税 (paper duty) の撤廃は、新聞の価格の引き下げを可能とすると共に、発行部数を急増させた。またこれら「知識の課税」撤廃の直接の結果は、「安い都市日刊紙と広範な地方日刊紙の出現」⁽²⁹⁾であった。

印刷技術の改良、パルプによる生産の開始と紙の価格の低下、今や資本の論理に基づくようになった新聞の広告スペースの拡大—といった多くの要因が、19世紀中葉以降の商業新聞の拡大へと導く。大衆とジャーナリズムとの距離を遠いものにしていた「知識の課税」が撤廃されるに至り、価格の引き下げ、それに伴う発行部数の拡大をもたらした、相対的に大衆との距離が縮まっていく。19世紀後半に至って、徐々にジャーナリズムは大衆の手の届く範囲内に達するようになる。

読者の政治的モウティブと密接に関係のあるラディカルプレスは、その

形態を変えながらジャーナリズムに吸収され、また18世紀以来の大衆の読み物(chapbook等)に受け継がれてきたポピュラーカルチャーも、一方は安小説の類へ、他方は新聞・雑誌のジャーナリズムへと吸収されていくのである。換言すれば、ジャーナリズムは、大衆の積極的な読者形成の最も基本的なモウティブである政治意識と娯楽・気晴らしとしてのモウティブをもつ読者層を受け継いできたのであった。

お わ り に

大衆読者層の形成、発展という「社会現象」は極めて多くの要因から成るものであり決して一面的に捉えることはできない。本稿で扱われた要因は、それら複合した多くの要因のうち一部に注目したにすぎない。この点を踏まえて、大衆読者層の形成のプロセスを今一度総括してみたい。

本稿では取りあげなかったが、大衆読者層形成の主な内的要因として、公教育及び多くの社会教育施設による教育の普及及びリテラシーの拡大がある。初期の初等教育の普及はそれ自体がもつ“教化”的性格ゆえに大衆読者層形成に大きく貢献したとはいいがたい。教育の「質的」高まりが見られるのは、1870年初等教育法制定以降であり、その波及効果として国民のリテラシーが近代型の90%台に達するのは、ほぼ1880年代後半であった。大衆読者層成立の内的要因が整うのは、この時期以降とみてよからう。⁽³⁰⁾

一方本稿で取りあげたように、読者を取り巻く外的要因が整うのは、版権の撤廃、紙の量産化等により価格の低下が始まる1830年代以降、特に安価な大衆本の到来する19世紀半ば以降となる。また、大衆の政治的モウティブと密接な関係にあったラディカル紙が、その読者と共に商業新聞に吸収されていくのは、基本的に一連の知識の課税が撤廃される1860年以降をまたなくてはならない。このように、大衆読者層形成の内的及び外的要因が整ってくるのは、19世紀後半から末期にかけてであることが述べられてきた。

また本稿では扱えなかったが実際に大衆にアクセサビリティを与え、大量の読者層形成に少なからず貢献してきた“Borrowing”の「チャンネル(channel)」も重要な要因である。特に当時多数存在した「コーヒーハウス」や「library」といったコミュニケーションチャンネルの要因は、教育の普及とリテラシーの拡大といった内的要因、本稿で扱ってきた外的要因—プリントメディアの拡がり—と共に、大衆読者層形成の第3の主要な要因として見落とせないものである。この要因と大衆読者層形成の相関に関する研究は今後の課題であり、それらについては稿を改めて述べることにしたい。

[注]

- (1) Williams, Raymond “Communications” Penguin Books, 1968. p. 22
- (2) 小池 珪 “18世紀のジャーナリズム” 「18世紀イギリス研究」 牛牟田夏雄編 研究社, 1971. p. 276
- (3) Williams, Raymond “The Long Revolution” Penguin Books, 1961. p. 201
- (4) Morison, Stanley “The English Newspaper 1622-1932” Cambridge Univ. Press 1932. pp. 71-80 参照
1702～15年の間に、この Daily Courant に続き、既に17世紀末期からあった The thrice-weekly post (eg. The Post Boy, The Post Man, The Flying Post) のより発展した形態の The thrice-weekly evening post が出現する。(eg. The Evening Post, The St. James Post)
- (5) 牛牟田夏雄(等) “イギリス文学史” 東京大学出版会, 1955. p. 106
- (6) Watt, Ian “The Rise of Novel” Penguin Books, 1957. p. 57
- (7) 出口泰生 “19世紀初期の英国文芸雑誌とその背景” 英語書年, vol. CX IV. No. 5 1968. p. 311
- (8) Watt, op. cit., p. 57
- (9) Ibid., p.58
- (10) 小池 珪, 前掲書. p. 284
- (11) 半ペラまでのもの半ペニー、全紙までのものは1ペニーのスタンプを押した印刷用紙を使用させることを規定した。1756年にはさらに半ペニーずつ増額される。また週1回以上発行の新聞には、1シリングの広告税も課せられた。
- (12) 例をあげると The Morning Chronicle (1770), The Morning Post

(1772)

The English Chronicle (1779), The Morning Herald (1780), Aurora (1781)

Noon Gazette (1781), The English Chronicle (1786), The World (1787)

The Daily Universal Register, The Times (1789), The Star (1788)

The Oracle (1789), Woodfall's Diary (1789) 等,

1770年代から末期は新聞の発展初期となるのである。

- (13) 1791年 Part One が3sで売りだされるや、例えば London Constitutional Society はそれを、50,000部売りさばいた。翌年最初の reprint 版ができると、わずか1ヵ月の間に32,000部も売れた。続く1793年には、20,000部も発行され、Part Two にいたっては、1,500,000部も売れたのであった。しかし、Altick はこの数値をやや誇張であると指摘している。(Altick, op. cit., pp. 70-71)
- (14) Morton, A. L & Tate, George "The British Labour Movement 1770-1920" 1956 古賀良一訳「イギリス労働運動史 1770-1920」 法政大学出版局, 1970. p. 18
- (15) Webb, R. K. "The British Working Class Reader" George Allen Unwin Ltd. 1955. p. 163
- (16) Altick, op. cit., p. 70
- (17) Morton (古賀良一訳), 前掲書, p. 18
- (18) Williams, op. cit., p. 209 (Long Revolution)
- (19) 一方この時間(19世紀初期)に見落とせないのが、一連の独立自営の評論紙(Quarterly)の出現であった。代表的なものは、The Edinburgh Review, The Westminster Review, The Quarterly Review であった。これらを支えたものは主として中産階級の読者層であり、「イデオロギー、政治、審美の各分野において中産階級がもつ選択の基準を形成するのに一役買った」のである。
参照: Coser, Lewis A "Men of Ideas" 高橋徹 訳 「知識人と社会」 p. 75
- (20) Altick, op. cit., p. 322
- (21) Morton (古賀良一訳), 前掲書, p. 42
- (22) Political Register が大衆のもとに届くためには、印紙税によりあげられているその価格(1s, ½ d.) が下げられねばならなかった。そこでコベットは、Political Register を従来の形成でない——一切のニュースや新聞をのせない「レジスター」2ペンス特別号を発行し20万部を売り尽くすとともに、続けて無検印の「2ペンス・レジスター」紙を定期的に刊行し、5万部の定期部数を確保するにいたった。

- (23) 香内三郎 “近代大衆文化の形式と印刷” *Energy*, vol. 10 No. 3 1973. p. 18
- (24) Altick, op. cit., p. 329
- (25) Williams, op. cit., p. 213 (Long Revolution)
- (26) Morton (古賀良一訳), 前掲書, P. 64
- (27) 具体的数字でみるなら,
新聞の売り上げ高は, 1816年から1836年の間に33%増加し, 1836年から1882年の間にほぼ600%の増加をみせている。例えばタイムズは, 1837年—11,000部, 1847年—30,000部, 1855年—60,000部と発展する。
- (28) これら Penny Weekly には—Bell's Penny Dispatch, Sporting and Police Gazette, Newspaper of Romance, Penny Sunday Chronicle—これらは1840年代に発行された。また最も底辺にまで至ったものには—the Town, the Fly, Peeping Tom, the Fast Man, the London Satirist 等があった。
- (29) Williams, op. cit., P. 219 (Long Revolution)
- (30) 詳しくは以下を参照されたし。
中島純一 “イギリスにおける近代読者層の成立” *Annals of Japan Society of Library Science*. vol. 22, No. 1 May 1976
中島純一 “David Riesman における社会的性格論—3類型をめぐって” *社会心理学評論*, 東京大学社会学研究科 Vol. 2, No. 1 1983